

Manabu Kawagoe

原点回帰

The starting point

川越学

かわごえ・まなぶ

セカンドウィンドAC監督

会員1000人超す陸上クラブチーム

念願だった独立運営方式 トップ選手から市民ランナーまで

長距離ランナーの道を歩むきっかけになった恩師の教え「継続が大切」。選手から実業団のコーチ、監督を経て長年の夢だったというクラブチームを立ち上げた今もその言葉を胸に抱く。「セカンドウィンドAC」は会員数1000人を超す。トップ選手から市民ランナーまでが一緒に、それぞれの目標へ走り続けている。



クラブにはアジア大会女子マラソン日本代表の2人など有力選手も所属する。

クラブ運営の拠点となる都内のセカンドウィンドビル。



「セカンドウィンドAC」というクラブチームで、マラソンや長距離走の選手を育成、指導されています。

単一の企業を中心となっている実業団とは違い、サポーター会員の年会費などで運営されているランニングクラブチームです。昨年の名古屋国際女子マラソンで優勝した加納由理選手や一昨年のアテネクラシックマラソンで優勝した尾崎朱美選手、ホノルルマラソン優勝の嶋原清子選手などが所属しています。トップ選手の指導や若手選手の育成だけでなく、トップ選手による市民ランナーへの基本的指導も行っており、「ミラミッド」型のチームを目指しています。設立からまもなく4年ですが、会員も1000人を超えました。昨年は日本陸上競技連盟の「日本陸連アスレティックアワード2010」特別賞を受賞しました。独立運営方式のクラブチームとして、ランナーの底辺拡大とトップ選手の育成に大きく貢献したとして評価されました。

企業に属さないクラブチームにした理由は、

資生堂のランニングクラブ監督をして、2000年前後から、他の企業チームが、会社の経営状況悪化で休廃部の憂き目に遭うようになってきました。ライバルでもあり、仲間でもあった選手やスタッフが行き場をなくしていったのです。こうした現実や、また買った選手育成という立場からも、企業の経営状況に左右されない活動拠点をつくらうと思いました。

主に代々木公園でランニング教室を開き、選手やスタッフがコーチしています。平日は夜の教室になりますので、サラリーマンなど仕事が終わってから参加する人が多いですね。最近は女性も増えてきました。「自身も長距離の選手でした。南大隅町(旧佐多町)出身です。小学校までは近所の友達と野球をするのが好きな普通の子でもでした。ただ、競走すると速かったので、「俺は速いんだなあ」という自覚がありました。郡中学校では駅伝部に所属。1学年30人余りという小さな学校だったので、クラブ活動は二つだけ。柔道部希望だったので、入部者の少ない駅伝部に入ってくれと頼まれたんです。顧問は校長先生でしたが、実は県下二周駅伝の監督もされた方。本格的な指導を受けることができませんでした。これがきっかけでランナーへの道を歩むことになりました。当時先生に言われたのが「継続することが大切だ」という教え。その後、自分自身の体験の中でも、身にしみて分かるようになり、今では自分の言葉になっています。

良い記録を残されていますね。中学時代は競技会がある鹿児島市までは遠くでなかなか出場できませんでした。翌日新聞に載った記録を見ると、自分が練習で出しているタイムの方が上だったことも。2年生の時に全国通信大会の1500mで優勝しました。鹿児島南高校では当然陸上部に入り、1年生の時に長野国体3000mで優勝。3年生の時に出場した栃木国体で、早稲田大学の中村清監督とお話する機会がありました。マラソンの瀬古利彦選手を指導した方です。これが縁で早稲田大学に進むことに。2、3年生の時は箱根駅伝も走り、優勝にも貢献できました。

その後実業団に進まれたわけですね。4年生の時に中村監督が亡くなりました。当時、中村監督以上の指導者はいないと思っていたので、走ることをやめようと思いましたが、しかし入社した資生堂で「走る気があるなら東京に残ってもいい」といわれ、「それもいいかなあ」と、また走りはじめたんです。当時は駅伝チーム。実業団のチームも多く、資生堂でもやろうというところになったのですが、人がいなくて選手とコーチを兼ねて

なかなかに成績は向上が、10年ぐら経ってコーチに専念。2006年、実業団対抗女子駅伝で悲願の優勝を果たしました。このときすでに、クラブチームを作るため資生堂を退職することを決めていたので、けじめを付けることができました。クラブチーム設立は相当な決断が必要だったのでは。自分は優柔不断なところがあり悩むタイプなのですが、このときは「勢い」ですね。ともかく自分の夢、理想を実現したいという一心でした。夢を語ると賛同してくれる人がいて、一緒に走っていた選手たちも分かってくれました。コーチをするというのは人と接すること。真剣に話していくと仲間もできたり、応援もしてもらえたと思います。発足時は資生堂から来た選手4人にスタッフ4人だけ。会員を募集してもなかなか集まらず、10人も来なかったことがありますが、それが今では1000人を超えるまでに。でもまだまだ。3000人集まれば経営的にも安定して、活動が順調に展開できるのではないかと考えています。

今後の目標を聞かせてください。企業スポーツとは違い、買った教育指導のもとに強い選手を育てることです。世界選手権やアジア大会、それに各地のマラソン大会にも出場し、良い成績を出しています。鹿児島には帰ることがありますが。昨年、佐多岬マラソン参加のために里帰りしました。旧友たちはみんな人相や体型が変わっていたけど、それぞれに声をかけてもらって本当に懐かしかったですね。鹿児島はやはり人がいい。自然も豊富です。これまでは自分のことに必死で余裕がなかったのですが、今は「恩返ししたい」「何か鹿児島のためにできないか」と考えています。

クラブからオリンピック選手が誕生するとうれしいですね。現実にはそんなに甘くはありませんが、強い選手を育成して、それでさらに人が集まるという循環ができればいいなと思っています。「これまでの支えになったものは何でしょうか。」「義理と人情」。これまで家族をはじめ多くの方々に支えられてきました。高校のときに自分たちのあこがれだった浜田安則選手が先生として来られ、教えを受けたこともあります。これまでキーマンというべき人たちと出会い、その出会いを大切にしています。

鹿児島には帰ることがありますが。昨年、佐多岬マラソン参加のために里帰りしました。旧友たちはみんな人相や体型が変わっていたけど、それぞれに声をかけてもらって本当に懐かしかったですね。鹿児島はやはり人がいい。自然も豊富です。これまでは自分のことに必死で余裕がなかったのですが、今は「恩返ししたい」「何か鹿児島のためにできないか」と考えています。

